

女性農民工の母親役割に関する意識と行動
—中国四川省留守児童をめぐる遠隔養育を軸に—

張迎霞 (神戸大学)

中国においては、改革開放政策以降の市場経済化と都市化の進展により、農村部から都市部への人口流入が加速していた。それに伴って「留守児童」問題が深刻な社会問題として浮上してきた。留守児童とは、両親または片親が都市部で就労するため、長期にわたり親と離れて農村で生活する子どもを指す。2006年以降、留守児童の家庭教育の欠如や、祖父母により「隔代扶養」が子どもの社会性の発達に不利に作用する傾向があることが指摘されてきた(曹 2022 ; 江 2022 ; 張 2007 ; 張 2014 ; 庄 2006)。こうした隔代扶養に関する課題のなかで、実際に育児を担えない母親たちが、母親役割をどのように捉え、どのような方法で子どもとの関係維持を図っているのかという視点が重要となる。特に、出稼ぎ先にいる母親たちは、祖父母や親戚への育児依存という現実を受け入れつつも、単なる「不在の親」ではなく、遠隔地からでも母親としての役割を果たそうと模索している。ここで注目すべきは、「留守児童の母親」としての女性が、経済的責任と養育責任の間でどのような葛藤や調整を経験しているのかという点である。

一方で、女性農民工は移動先の都市部において、労働力として重要な役割を果たしているにもかかわらず、伝統的な性別役割分業の影響を受け、家庭内では依然として育児の主要な担い手とみなされている(許・辛 2021 ; 張・熊 2024)。既存研究においては、主に彼女たちが直面する労働と家事・育児の二重負担に焦点が当てられてきたが、子どもと離れて暮らす「遠隔育児」という状況で、彼女たちが母親役割をどのように認識し、具体的にどのように実践しているのかに関する実証的な分析は不足している。この点で、To et al. (2018)の研究は貴重な知見を提供しており、留守児童の母親たちは、どのように子育て経験を主観的に捉え、母性の意味を構築しているのかを明らかにしている。しかし、この研究は経済的支援者としての役割へのシフトや伝統的な母性規範との葛藤が指摘されてはいるものの、個々の母親が持つ役割意識の差異を明らかにするまでには至っていない。こうした意識の違いが具体的な育児行動にどのように影響を及ぼすのかについての実証的な分析も不足している。

以上を踏まえ、本研究は、都市部に出稼ぎに出ている女性農民工が、特に留守児童の母親としてどのような役割意識を持ち、どのような行動を取っているのかを明らかにする。

本研究では四川省成都市で働く留守児童の母親13名を対象に、半構造化インタビューを行った。文献レビューとインタビュー調査を通して、主に二つのことを明らかにした。

まず、留守児童母親たちは総じて、母親としての基本的責任は、子どもに対する物質的支援と経済的保障を提供することであると認識している。このような経済的支援は、子どものそばにいられないという現実を補う手段として位置づけられており、子どもにより良い生活環境や教育機会を与えることが、自らの母親役割の重要な遂行方法であると理解されている。また、留守児童の母親は、都市部での長時間労働や生活環境の制約、家庭内関係、子どもの生活状態といった複数の要因に影響されながら、母親役割を遂行しており、その過程は不断の交渉と調整を伴っていた。経済的責任と養育責任との板挟みに対して、多様な適応戦略を展開していることが明らかとなった。

キーワード：女性農民工、母親役割、留守児童